

地域創生に繋がるゼミナール科目におけるエージェンシー育成の可能性

Possibility of Agency Development in Seminar Courses Leading to Regional Development

杉 本 あ ゆ み

Ayumi Sugimoto

（要約）

本研究では、これからの複雑性が高い予測不可能な時代を生き抜くために、学生が高等教育機関で身に付けるべき能力として注目されている「エージェンシー」を育成する教育方法を考察した。初年次学生を対象とした筆者の担当科目「ゼミナールⅠ」において、特定の地域を深く調査することで、その地域が抱える課題を明らかにし、解決策を見出し実践活動に繋げるという、PBL型課題解決授業に至る前段階としての調査活動や、授業内で実施した協働評価学修を含んだ経験学修サイクル実践の効果を、社会人基礎力の自己評価ポイント、及び、事後アンケート結果にて測定した。調査の結果、受講学生は各々が調査したいと思う地域を定め、関連文献を深く調べ、実際に現地に赴き、その地域が抱える課題を明らかにする活動により、「学生エージェンシー」が醸成された可能性の一端が示唆された。

（キーワード）

地域創生、キャリア教育、課題解決型学修、エージェンシー、社会人基礎力

はじめに

本学は三重県津市にあり、津市は人口減少や少子高齢化などの課題を抱えており、地域創生が求められている。地域創生とは、地域の持つ独自の資源や特色を活かし、人口減少や地域経済の衰退に対応するための国や自治体の施策を指し、具体的には、地域の産業振興、観光資源の開発、移住や定住促進策などが含まれるが、単に経済的な側面だけでなく、文化や歴史、自然環境といった多面的な価値を再認識し、それらを生かした地域づくりが求められていると解される。

本学では、必修科目として「ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」が設けられており、複数の専任教員がこれらの科目を担当している。担当教員の一人である筆者は自身のゼミナールにおいて、地域創生を確実に実施するために必要な力とされる、「自ら主体的に考えて行動できる能力」、言い換えれば、「エージェンシー（Agency）」の育成を目指している。筆者が担当する「ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」は、1年後期「ゼミナールⅠ」で地域が抱える問題を探るべく地域について深く調べ探求し、2年前期「ゼミナールⅡ」では、「ゼミナールⅠ」で見出した課題に基づいて、課題解決に結び付く施策を考え、実行し、検証する。そして、3年後期「ゼミナールⅢ」でこれまでの地域研究実践内容を卒業研究レポートとして記録し、その内容を卒業研究発表会において口頭発表することとしている。本研究では、地域創生に繋がる活動報告として、1年後期「ゼミナールⅠ」に焦点を当て、この科目で受講学生が地域について深く探求する学修過程で、「エージェンシー」を身に付けられるかを考察する。

1. エージェンシー概念

2015（平成27）年より、経済協力開発機構（以下、OECD と表記する）が進めている「Education2030 プロジェクト」にある「エージェンシー」は、白井（2020）⁽¹⁾にて「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と定義付けられている、これからの複雑性が高い予測不可能な時代を生き抜くために身に付けるべき能力として注目されている概念である。

本ゼミナールでは、『OECD Learning Compass 2030 仮訳』⁽²⁾で「エージェンシー」を身に付けるべく推奨されている、自ら主体的に考えて行動できる能力を身に付けるのに有効な学習方法である、見通し（Anticipation）→行動（Action）→振り返り（Reflection）という「AAR サイクル」を参考にして、授業開始前に学生自らが学修目標を定め、その目標を達成できるように学修計画を立て、授業内外で学修を実践し、実践した学修内容を振り返り、学生同士で互いの情報を共有し、それぞれの良いところや改善点を述べ合い、協働で評価し合い新しい気づきを得て次の経験に活かす、を1サイクルとした「経験学修サイクル」を複数回繰り返す。この「協働評価学修を取り入れた経験学修サイクル」の繰り返しが、学生のエージェンシー育成に繋がるのではないかという仮説を立て、これを実証すべく、地域連携教育科目「ゼミナールⅠ」内で、協働評価学修を取り入れた経験学修サイクルを試み、その効果を受講学生自身の自己評価や、事後に実施した記述式アンケートや聞き取り調査の結果分析で検証することとした。

2. 社会人基礎力

「人生100年時代」と言われているこの時代において求められる能力について経済産業省は、以下の図1を用いて、「業界等の特性に応じた能力【アプリ】」と「社会人としての基盤能力【OS】」を挙げ、「人生100年時代の働き手は、【アプリ】と【OS】を常に“アップデート”し続けていくことが求められる。」としている。

また、「社会人としての基盤能力【OS】」に含まれる「社会人基礎力⁽³⁾」については、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」を3つの柱として、以下の図2、図3、図4のように表現している。

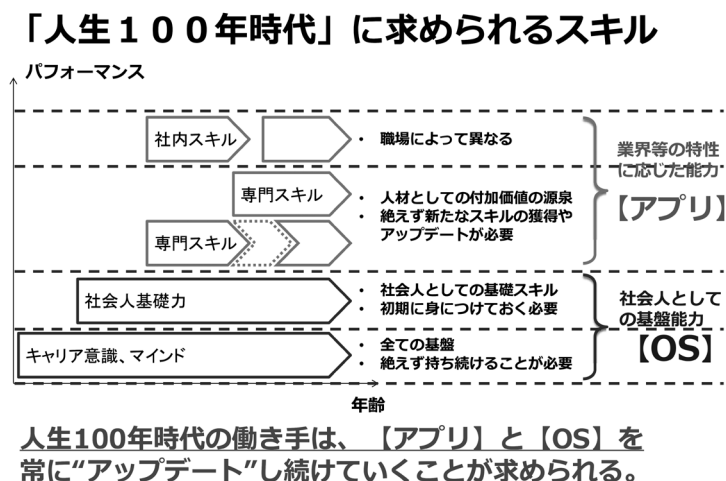


図1 人生100年時代に求められるスキル

【<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> より引用】

『前に踏み出す力（Action）』

～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～



主体性

物事に進んで取り組む力

働きかけ力

他人に働きかけ巻き込む力

実行力

目的を設定し確実に行動する力

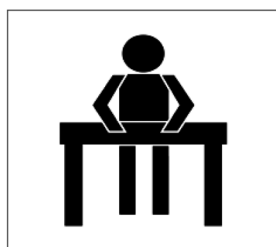
指示待ちにならず、一人称で物事を捉え、自ら行動できるようになることが求められている。

図2 社会人基礎力（前に踏み出す力）

【<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> より引用】

『考え抜く力（Thinking）』

～疑問を持ち、考え抜く力～



課題発見力

現状を分析し目的や課題を明らかにする力

計画力

課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力

創造力

新しい価値を生み出す力

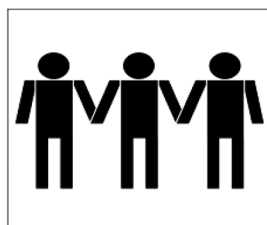
論理的に答えを出すこと以上に、自ら課題提起し、解決のためのシナリオを描く、自律的な思考力が求められている。

図3 社会人基礎力（考え抜く力）

【<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> より引用】

『チームで働く力（Teamwork）』

～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～



発信力

自分の意見をわかりやすく伝える力

傾聴力

相手の意見を丁寧に聴く力

柔軟性

意見の違いや相手の立場を理解する力

状況把握力

自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

規律性

社会のルールや人との約束を守る力

ストレスコントロール力

ストレスの発生源に対応する力

グループ内の協調性だけに留まらず、多様な人々との繋がりや協働を生み出す力が求められている。

図4 社会人基礎力（チームで働く力）

【<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> より引用】

本研究で注目している「エージェンシー」という能力は、社会人基礎力、中でも自ら考えて動くことのできる力と理解できる、「前に踏み出す力」と関連性の高い能力と考えた。従って本調査では、エージェンシー測定尺度として社会人基礎力を採用することとした。測定方法は、事前、事後で受講学生に自身の社会人基礎力がどの程度身に付いているのかをポイント形式で自己評価（12の能力要素について各5ポイント満点で評価）させ（表1）、その結果について事前事後で比較することとした。

表1 社会人基礎力自己評価シート（事前、事後で使用）

・主体性(物事に進んで取り組む力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・働きかけ力(他人に働きかけ巻き込む力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・実行力(目的を設定し確実に行動する力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・課題発見力(現状を分析し、目的や課題を明らかにする力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・計画力(課題解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・創造力(新しい価値を生み出す力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・発信力(自分の意見をわかりやすく伝える力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・傾聴力(相手の意見を丁寧に聴く力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・柔軟性(意見の違いや立場の違いを理解する力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・状況把握力(自分と周囲の人々との関係性を理解する力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・規律性(社会のルールや人との約束を守る力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0
・ストレスコントロール力(ストレス発生源に対応する力)	5 … 4 … 3 … 2 … 1 … 0

3. 調査内容

本研究で実施した調査については、以下のとおりである。

3. 1 調査概略

地域創生に繋がる2024年度後期必修科目「ゼミナールⅠ」において、協働評価学修、経験学修サイクルを実践し、その効果については、社会人基礎力自己評価ポイントと事後アンケート記述内容、聞き取り調査の結果を用いて、測定、分析する。なお、本調査は、本学における、2025年度研究倫理審査委員会の研究倫理審査を受け、承認されている（通知番号：2025-2-3）。

3. 2 調査対象

2024年度後期必修科目「ゼミナールⅠ」受講学生（初年次学生）13名

3. 3 調査時期

2024年9月から2025年1月

3. 4 授業内容

2024年度後期必修科目「ゼミナールⅠ」の全15回の授業内容は表2のとおりである。

表 2 2024 年度後期必修科目「ゼミナールⅠ」15 回授業内容

テーマ	地域探究プログラム【自身の住む地域を深く理解する】
到達目標	1.チームによる協働を通じて産業・経済・文化その他、様々な角度から地域の姿を理解し、課題を見出し、解決方法を構想することができる。 2.状況を的確に判断し、改善のための方策を提案し、解決できる。 3.地域企業等と連携して課題を見出し、解決に向けた活動を構想できる
授業概要	特定の地域について、産業・経済・文化その他、様々な観点から課題を見出し、自ら研究活動を行う。学外での情報・資料収集のためのフィールドワーク手法を身に付けグループ内での話し合いを通じて課題解決策を探る。
授業計画	1 オリエンテーション 学習の流れ、評価方法等の説明 2 研究テーマに沿った研究計画を立てる 3 研究計画に沿って具体的な分担や日程を検討する 4 ゼミメンバーで意見交換をして、研究方法について検討を加える 5 テーマに沿った研究活動①文献調査など 6 テーマに沿った研究活動②結果整理など 7 テーマに沿った研究活動③検討提案など 8 中間発表に向けた準備 9 中間発表 討論 10 テーマに沿った研究活動④内容追加など 11 テーマに沿った研究活動⑤内容整理など 12 テーマに沿った研究活動⑥内容分析など 13 研究の仕上げ、発表資料の作成 14 研究発表準備 15 研究発表 総括

3. 5 協働評価学修を含んだ経験学修サイクルの実践方法

授業開始前に学生自身が研究テーマを定め、テーマに沿って研究計画を立てる。授業内だけでなく、授業時間外も含め、自身が立てた研究計画を実践し、次回授業内で実践した内容を振り返る時間と、ゼミメンバーと協働で情報共有し、互いの良いところや改善点を、それぞれに示す、評価し合う時間を設ける。そこで得た新しい気づきを文章化（可視化）し、何らかの教訓を得て次の経験に活かす、を1サイクルとした「経験学修サイクル」を複数回繰り返すこととした。

3. 6 事後アンケート内容

最終授業で実施した事後記述式アンケート内容は表3のとおりである。

表3 事後アンケートフォーム

ゼミナールⅠ 事後アンケート	
学籍番号:	氏名:
この科目の授業を通じて、どのような知識、技能が身につきましたか。	
授業で身に付けた知識、技能を、今後、どこでどのように活用しようと考えていますか。	
授業開始時の研究計画通りに、調査を進めることができましたか。どのあたりが上手く進められ、どのあたりが上手くいきませんでしたか。理由とともに述べてください。	
授業を通じて自主的に学ぶ力が身についたと考えますか。理由とともに述べてください。	

4. 調査結果

以下、表4が学生の研究テーマと見出した課題内容、表5と表6が調査結果である。なお、表4に関しては、個人情報に紐づかないよう、ランダムに表記した。

5. 考察

まず、表4にある授業前に受講学生が各自考えた研究テーマと最終授業で明らかにした課題内容について見ていきたい。研究テーマに関しては、受講生の中で海外出身の者が1名おり、日本以外の国を研究テーマとして挙げているものが1件あるが、受講学生自身が居住している地域（鈴鹿市、亀山市、熊野市、玉城町、大紀町、）全体を対象としているテーマと、居住地域に存在する文化施設（三重県総合博物館、石水博物館、津市美杉ふるさと資料館、鈴鹿市考古博物館、斎宮歴史博物館）に焦点を当てて研究テーマとしているもの2つに大別された。また、授業内で調査を進め、最終授業で明らかにした課題内容については、居住地域全体の課題は「人口減少」に関するもの、文化施設の課題は「若年層の来

表 4 学生の研究テーマと見出した課題内容（ポイントのみ一部抜粋）

n=13

研究テーマ	調査後に見出した課題
・津市にある博物館に関する調査(三重県津市) ・津市の文化施設を調査する(三重県津市) ・石水博物館に関する調査(三重県津市垂水) ・津市美杉ふるさと資料館を調べる(三重県津市美杉町) ・三重県総合博物館の調査(三重県津市一身田) ・鈴鹿市考古博物館について知る(三重県鈴鹿市国分町) ・鈴鹿市について調べる(三重県鈴鹿市) ・玉城町に関する調査(三重県度会郡) ・大紀町について調べる(三重県度会郡) ・亀山市の歴史に関する調査(三重県亀山市) ・花火大会の歴史について調べる(三重県熊野市) ・斎宮歴史博物館について調べる(三重県多気郡明和町) ・生まれ故郷に関する調査(タイランド)	・津市内の文化施設の世代別来場者数を比較し、20代への認知度を上げる必要性を感じた ・平日・休日ともに若年層の来場者が皆無なので若年層に知っていただくにはどうしたらよいか ・特に平日の若年層の来場者が少ないことから、どうすれば若年層来場者が増えるのか ・イベント期間中の来場者は多いものの、平日の来場者が極端に少ない ・貴重な展示物があるにもかかわらず、平日・休日ともに来場者が少ない ・市のデータによれば、想定より早く人口減少が進んでおり、少子高齢化がより顕著になる ・津市内の文化施設の世代別来場者数を比較し、20代への認知度を上げる必要性を感じた ・平日に若年層の来場者が皆無であることを問題視し、どうすれば若年層来場者が増えるのか対策の必要性を感じた ・急速な少子高齢化が進み、高齢者の貧困問題や介護問題が社会的課題とされる ・人口減少割合は国や県と比較して低くなっているものの、生産年齢人口の減少が大きく、後期高齢者人口は増加傾向が大きい ・人口減少が激しく、特に卒業・就職時期の15～24歳における減少数が著しい ・2035年まで増加見込みの住宅団地地区と川崎地区東があるが、市街地や井田川用途地域内住宅団地は20%以上人口減少する予測 ・過疎化が激しく、花火大会以外に来ていただけるイベントはないか

場者が少ない」に関連するものが挙げられていた。これらの課題はいずれも地域創生に繋がるものであり、引き続き、「ゼミナールⅡ」における研究テーマとして継承していく。

次に表5についてだが、授業開始直後と授業終了時に、表1の「社会人基礎力自己評価シート」を使用し、学生自身の社会人基礎力について自己評価を実施したところ、各能力の平均値において、「スト

表5 社会人基礎力自己評価結果

n=13

主体性		働きかけ力		実行力		課題発見力		計画力		創造力		発信力		傾聴力		柔軟性		状況把握力		規律性		ストレスコントロール力	
前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
5	4	4	4	4	5	3	3	5	2	4	4	4	4	4	2	3	3	3	3	5	4	2	3
3	3	4	3	3	2	3	2	3	3	3	3	3	2	4	3	4	4	3	3	4	4	2	2
3	4	2	2	3	3	2	3	3	3	2	2	2	2	3	3	3	3	4	4	4	4	3	3
4	5	3	5	2	2	2	2	2	2	1	1	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
3	2	4	3	4	4	4	5	2	4	3	4	3	4	3	4	2	4	2	5	3	5	3	4
3	5	3	5	3	5	1	3	1	1	5	5	2	3	5	5	5	4	2	5	5	5	5	1
3	4	2	3	3	3	3	4	2	2	3	3	3	3	4	5	4	4	4	3	4	5	3	2
4	4	3	4	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	4	5	4	4	4	3	5	5	4	3
3	3	3	2	3	5	2	5	2	5	3	5	2	5	4	5	3	5	5	5	3	5	5	5
3	3	2	2	3	3	3	4	3	2	3	2	2	2	3	4	4	4	3	4	5	4	4	4
4	4	3	4	4	3	3	4	2	4	2	3	4	3	4	5	5	5	4	5	4	5	4	5
3	3	3	3	4	5	3	5	3	5	4	5	3	5	3	5	4	5	3	5	3	5	4	5
4	4	5	4	3	3	3	4	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3
3.5	3.7	3.2	3.4	3.2	3.5	2.7	3.6	2.6	3.1	3.0	3.4	2.9	3.3	3.7	4.1	3.7	4.0	3.4	4.0	4.0	4.5	3.5	3.4

マーカー太字:事前→事後が上昇、太字:事前→事後が同値

レスコントロール力」のみが、事前 3.5 → 事後 3.4 と低下したものの、その他の 11 能力については上昇した。特に、「課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）」が事前 2.7 → 事後 3.6 と上昇ポイント（0.9）が高かった。これは、最終授業で受講学生自身が見出した調査地域が抱える問題を明確にし、可視化したためだと考えられる。次いで、「状況把握力（自分と周囲の人々との関係性を理解する力）」が事前 3.4 → 事後 4.0 と上昇ポイント（0.6）が高かった。これは、各授業内で、ゼミメンバーと意見交換し、批評する時間（協働評価学修）を設けたり、調査段階で施設職員などの地域の方々とのコミュニケーションが図れたためだと考えられる。

特に、「エージェンシー」に関連性が高いとされる、「前に踏み出す力（アクション）」に含まれる、「主体性（物事に進んで取り組む力）」、「働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）」、「実行力（目的を設定し確実に行動する力）」に対する自己評価については、「主体性」事前 3.5 → 事後 3.7、「働きかけ力」事前 3.2 → 事後 3.4、「実行力」事前 3.2 → 事後 3.5 と、わずかではあるものの、ポイントが上昇しており、授業を通じてエージェンシーが育成された可能性の一端が示唆された。

事後アンケートの記述内容、および聞き取り調査の結果については、紙幅の都合上、記述内容のポイントの一部抜粋して表にした（表 6）。「この科目の授業を通じて、どのような知識、技能が身につきましたか。」という質問には、「コミュニケーション能力」と回答した受講学生が 6 名（46.2%）と最も多く、次いで、「協調性」2 名（15.4%）と続いた。

「授業で身に付けた知識、技能を、今後、どこでどのように活用しようと考えていますか。」という質

表 6 事後アンケート、聞き取り調査結果（ポイントのみ一部抜粋）

n=13

この科目の授業を通じて、どのような知識、技能が身につきましたか。	
・コミュニケーション能力	6 名 (46.2%)
・協調性	2 名 (15.4%)
・主体性	1 名 (7.7%)
・計画性	1 名 (7.7%)
・調査力	1 名 (7.7%)
・アカデミック・ライティング力	1 名 (7.7%)
・マナー	1 名 (7.7%)
授業で身に付けた知識、技能を、今後、どこでどのように活用しようと考えていますか。（複数回答可）	
・将来、企業で働く時	8 名 (61.5%)
・就職活動時	3 名 (23.1%)
・アルバイト先で接客する時	2 名 (15.4%)
・人間関係構築時	2 名 (15.4%)
・プレゼンテーション実施時	1 名 (7.7%)
授業開始時の研究計画通りに調査を進めることができましたか。どのあたりが上手く進められ、どのあたりが上手くいきませんでしたか。（一部抜粋）	
・計画通りに調査を進めることができた。	
・テーマを決めるのに時間がかかりすぎたが、最終的には計画通りに調査を終えることができた。	
・他の科目の課題もあり、調査を始めるのが遅くなってしまった。	
・計画を立てることは出来るが実行することは難しいということに気づいた。グループワークは計画通りに進められた。	
授業を通じて自主的に学ぶ力が身についたと考えますか。理由とともに述べてください。（一部抜粋）	
・今回の調査をやり遂げることによって、高校の時よりも自主的に学ぶ力は身に付いたと思います。	
・授業で学んだ知識を活用していきたいと思うので、自主性は身に付いたと思います。	
・身に付いたと考えます。理由としては、課題などの日程を決めたりなど、自己管理が出来るようになったからです。	
・4 月の頃よりは身に付いたと思います。自主的に動かなければ、知ることができないことがあり、変わることもできないと思うようになったからです。	

問には、6割以上の受講学生が、「将来、企業で働く時」と回答しており、次いで、「就職活動時」、「アルバイト先で接客する時」、「人間関係構築時」と続いた。

「授業開始時の研究計画通りに調査を進めることができましたか。どのあたりが上手く進められ、どのあたりが上手くいきませんでしたか。」という質問には、受講学生全員が締め切り日までに最終レポートを提出できていたこともあり、「計画通りに調査を進めることができた。」と全員が記述していた。

「授業を通じて自主的に学ぶ力が身に付いたと考えますか。」という質問には、受講学生全員が、「今回の調査をやり遂げることによって、高校の時よりも自主的に学ぶ力は身に付いたと思います。」「授業で学んだ知識を活用していきたいと思うので、自主性は身に付いたと思います。」「身に付いたと考えます。理由としては、課題などの日程を決めたりなど、自己管理が出来るようになったからです。」「4月の頃よりは身に付いたと思います。自主的に動かなければ、知ることができないことがあり、変わることもできないと思うようになったからです。」など、自主的に学ぶ力が身に付いたことに繋がる前向きな内容を記述していたことから、授業内容が「エージェンシーの獲得」に結び付く可能性が示唆された。

6. おわりに

以上、初年次学生を対象として筆者が担当した、2024（令和6）年度後期必修科目「ゼミナールⅠ」において、協働評価学修を含んだ経験学修サイクルを実践し、社会人基礎力を評価基準とした事前・事後自己評価、および、学修の振り返り事後記述式アンケート、聞き取り調査により、受講学生に「エージェンシー」が身に付くかどうかを検証したところ、協働評価学修を含んだ経験学修サイクル実践の有効性の可能性の一端は示唆された。今後もこのような調査を継続的に実施し、より多くの事例を集め、分析し、結果を一般化させ、高等教育機関における地域創生に繋がる地域連携教育開発に貢献することができればと考えている。

引用・参考文献

- (1) 白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来－エージェンシー、資質・能力とカリキュラム－』ミネルヴァ書房（2020）
- (2) OECD Future of Education and Skills 2030
(<https://www.oecd.org/en/about/projects/future-of-education-and-skills-2030.html#strand1>). 2025.2.22 取得
- (3) 社会人基礎力（METI/ 経済産業省）
(<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>). 2025.2.22 取得